

村上春樹の小説は何故、世界中で読まれているのか？～文章・構成・メッセージから考える現代小説～

福岡県立鞍手高等学校

山下 竜馬

指導教員 長尾俊太郎

要旨

村上春樹の小説は現代において商業的な成功をおさめ、現在では世界36か国語に翻訳されている。それは村上春樹が「非常に読みやすい文体」を作り上げることによって、読みやすさだけでなく、同時に翻訳されやすくなっているためである。

また、遍歴物語のようにテーマを複雑に入れ込む物語構造によって読者それぞれが独自の解釈を持って物語を読み進めていけることも大きな要因である。

村上春樹の作品が「日本語性」を排することによって、日本語文学が世界でも成功を収めたという事例は、日本語の新しい可能性を垣間見ることができるものであると思う。

1 テーマ設定の理由

村上春樹、という名前を日本人なら大半の人が聞いたことがあるように思う。新作が発売されるたびにハルキストと呼ばれる愛読者たちが長蛇の列をなして書店に並ぶ光景や、毎年ノーベル文学賞受賞に対する期待の声メディアで大々的に報じられるためである。現在では村上春樹の作品の多くが大ヒットを記録している。

1987年に発表された「ノルウェイの森」は上下巻合わせて1000万部を上回るベストセラーになっている。海外ではフランツ・カフカ賞やエルサレム賞、アンデルセン文学賞など多くの賞を受賞し、現在では世界36か国語に翻訳されるなど、評価と人気が非常に高いことが分かる。

では、何故、村上春樹の小説は国籍問わず多くの読者に支持され、小説の市場価値が衰退してしまった現代社会において、これほどの存在感を保ち続けられるのだろうか。このことに疑問を感じ、研究を行うことにした。

2 研究の方法

村上春樹の作品を全作品読む。その後村上春樹の評論文を読み、既存の研究について理解をする。

その上で大まかな構成として「文体」と「物語の構成」に着目し、その2つが村上春樹の作品でどのような機能をなしているのかを考察していく。

物語を読み解いていく上で本人の意図などを考察の対象に入れず、出来るだけ客観的な考察が出来るようにするため、参考文献として対談集やインタビュー集などは用いなかった。

3 これまでに明らかにされている研究結果

村上春樹のテキスト研究というものは他の作家に比べ、数が少ないものであった。村上春樹がデビューした頃などは文学研究者の間で「イロモノ」として扱われていたようだ。そのため村上春樹の物語は「都市小説」であるという見解が多くの論文で見られた。

「都市小説」というのは名前の通り、都市を舞台にして描かれた小説である。

村上春樹の小説においては登場人物ごとの人間的な関わり合いが希薄に描かれており、そ

れが物語全体に独特なムードを醸し出している。

このことに対し、多くの批評家が現代社会が経済成長を遂げることで、人間の共同体への帰属意識が薄らぎ、独立した個人の物語が生まれたのだという考えをしめしている。他にも主人公である男性とヒロインの関係が物語世界の大きな問題と直結しているという物語は「セカイ系」と呼ばれ、のちに多くのアニメやライトノベルでも大きく見られるようになったものとして、村上春樹が日本のサブカルチャーの元祖なのではないかという見方もある。

4 本論

(1) なぜ世界中の人々から読まれるのか

一通り物語を読んで感じたことだが、他の作家の小説に比べ、読みやすいと思った。他の日本人作家は一つの文章を長く書いているのに対し、村上春樹は一つの文章を非常に短く区切っている。

目を閉じて店を思い浮かべると、コンビニの音が鼓膜の内側に蘇ってきた。それは音楽のように、私の中を流れていた。自分の中に刻まれた、コンビニの奏でる、コンビニの作動する音の中を揺蕩いながら、私は明日、また働くために、目の前の餌を身体に詰め込んだ。

村田紗耶香「コンビニ人間」より引用

眠れなくなってもう十七日めになる。私は不眠症のことを言っているのではない。不眠症のことなら少しは知っている。大学生の頃に、一度不眠症のようなものにかかったことがある。「ようなもの」と断るのは、その症状が世間一般に不眠症と呼ばれているものに合致するかどうか確信が持てないからだ。

村上春樹「眠り」より引用

上の二つの文章を比較すると分かりやすい。村田紗耶香（日本の作家）は句点を多用し、一文の情報量が多く細やかな表現をしているのに対し、村上春樹は一文が小さく情報量が少ない。日本文学的な細やかな表現ではなく、内容の把握のしやすい説明的な文章である。こうすることで読者が内容の把握がしやすく、表現にひっかかることなく読み進めていくことができる。

ここまでの話はすべて本筋には関係ない。作家としてデビューしたとき、私はとても若かった。運よく作品は注目を集め、たくさんの人々から交際を求められた。当時のことを思い出すと、もの悲しい気分になる。

サマセット・モーム「月と六ペンス」より引用

上記の文章はサマセット・モーム「月と六ペンス」（金原 端人訳）より引用した一説である。いわゆる翻訳された海外文学ということになる。こちらにも村上春樹と同じように一文が短く、情報量が少ないという特徴がみられる。この文章は英語が日本語に翻

訳されることで生まれたものである。では翻訳された日本語の文体に近いものは、英語へ翻訳されやすいのではないだろうか。一文の情報量が少ないのは英語などに見られる特徴である。そのため、この文体は翻訳されやすく翻訳されても言葉が持つ意味合いを崩しにくいものになっていると考えた。このような文体にすることで読みやすさを獲得しただけでなく、世界36か国語に翻訳される小説が出来ているのだろう。

(2) 村上春樹作品の物語構造について

現代の小説の多くは物語理論（ナラトロジー）にそって書かれている。物語理論とは物語の構造や描かれ方を理論化したものである。その中に「生きて帰りし物語」というものがある。

生きて帰りし物語の流れ

- ①主人公が何かを失う
- ②主人公が失った何かを取り戻す or それに代わる何かを手に入れようと決心する
- ③主人公が何かしらの行動を起こし、それまでいた日常的空間から非日常的空間へと移動する
- ④主人公は敵や協力者（味方）に出会う
- ⑤主人公たちが窮地に追い込まれるまたは物語の山場
- ⑥主人公は何かを手に入れ、また日常的空間に戻っていく

このような流れは現代にいたるまで多くの物語にみられる。桃太郎を例に挙げると、以下の通りである。

桃太郎

- ①桃太郎の村の財宝が鬼に奪われる
- ②桃太郎は鬼を倒そうと決心する
- ③桃太郎は村（日常的空間）から鬼ヶ島（非日常的空間）へと旅立つ
- ④道中でサル・イヌ・キジを味方にする
- ⑤鬼ヶ島で戦いを繰り広げる
- ⑥財宝を手に入れ、桃太郎たちは村（日常的空間）へと帰っていく

つまり物語は失った何かを取り戻すために始まり、それが取り戻されることによって終りを迎えるものである。現代の多くの物語もこの流れに沿って描かれ、そのため物語を見ている私達受け手は、先の予想をしながら物語をみることが出来る。

一方で村上春樹の作品では、この一定の流れの一部が変更・応用されて使われている。

ノルウェイの森

- ①主人公の彼女がある日、いなくなってしまう
- ②主人公は彼女の力になりたいと思う
- ③主人公は彼女のいる精神疾患をもった患者の療養施設に足を運ぶ
- ④主人公は様々な人に出会う
- ⑤しかし彼女は自殺してしまう

ノルウェイの森では最終的に主人公が更に何かを失ってしまうという結末で物語が終わってしまう。一見何も手に入れていないように感じる終わり方だが、「主人公がどれだけ頑張っても彼女を取り戻すことが出来ない」という事実を手に入れたと解釈することも出来る。つまり村上春樹の物語は「失うことによって成立する」という物語を成立させているのだ。

(3) 遍歴から受け取る「リアリティ」という観点

村上春樹の小説では主人公が目に見える成長を遂げるというものはない。通常、物語の中での経験を通じて主人公の考え方が変わったり、単純に強くなる・肉体的に成長するというものだろう。しかし村上春樹は最終的な主人公の成長というものを重点的に描くことはない。このように物語を通して主人公が成長しない物語を「遍歴物語」という。具体例をあげるとドラえもんやアンパンマンなど。日本の児童文学研究者の石井直人によって提唱されている理論だ。石井によると、遍歴物語には以下のような作用がある

- ①同じ展開の物語を反復的に描くことで物語が持つテーマ性を読者に伝えるというはたらき
- ②登場人物それぞれが固有の観念（イデオ）をもっており、それに基づいた言動など一定の行動様式がある。

確かにアンパンマンでは毎回反復的にアンパンマン（善）とバイキンマン（悪）の戦いが描かれており、必ずアンパンマン（善）が勝つ。ジャイアンやスネ夫なども登場人物たちもそれぞれ決まった考え方をもっており、いつでもその考え方に基づいた一辺倒な言動をする。このような物語を見ている受け手は、ドラえもんを見て一つのテーマを見てとったりすることはないし、同時にアンパンマンがどのようなテーマを持っているのかを分析せずとも理解しているだろう。つまり「遍歴物語」の利点は反復的に描けばテーマ性を前面に押しだし、またテーマを理解せずとも多種多様な登場人物の言動にメッセージを感じたりしている。つまり遍歴物語は何となく読めてしまう物語でもあるのだ。

僕はうなずく。「うん、むずかしいことはよくわからないけれど、そういうことかもしれない。三四郎（注釈：夏目漱石の『三四郎』）は物語の中で成長していく。壁にぶつかり、それについてまじめに考え、なんとか乗り越えようとする。そうですね？でも『坑夫』（注釈：夏目漱石の『坑夫』）の主人公はぜんぜんちがう。彼は目の前に出てくるものをただだらだら眺め、そのまま受け入れているだけです。もちろんそのときどきの感想みたいなのはあるけど、とくに真剣なものじゃない。それよりはむしろ自分の起こした恋愛事件のことばかりくよくよと振りかえっている。そして少なくともみかけが、穴に入ったときはほとんど変わらない状態で外に出てきます。つまり彼にとって、自分で判断したとか選択したとか、そういうことってほとんどなにもないんです。なんていうのかな、すごく受け身です。でも僕は思うんだけど、人間というのはじっさいには、そんなに簡単に自分の力でものごとを

選択したりできないものなんじゃないかな」

「それで君は自分がある程度その『坑夫』の主人公にかさねているわけかな？」

僕は首を振る。「そういうわけじゃありません。そんなことは考えもしなかった」

「でも人間はなにかに自分を付着させて生きていくものだよ」と大島さんは言う。

「そうしないわけにはいかないんだ。君だって知らず知らずそうしているはずだ。ゲーテが言っているように、世界の万物はメタファー（比喩）だ」

村上春樹「海辺のカフカ」より引用

上記のシーンはとても象徴的なシーンであると感じた。物語では特定の経験を通して主人公が成長していく様子が描かれるが、現実はそのとも言い切れない。経験が悪い方向に転ぶこともあれば、何年後に初めて生きてくる経験というものもあるだろう。自分にとって明確な敵味方などこの世の中に存在せず、主義と主義のぶつかりあいなど日常茶飯事だ。

しかしその中でも私達は他人との共通項を探し、相対的に自己を見つめる。共感によって自己の精神の拠り所が生まれたりもする。そのような現実に近い「遍歴物語」はある意味ではリアリティを迫及した物語ともいえるかもしれない。

村上春樹の小説に多くの読者ががついているのも、多種多様なテーマを独自に感じ取れるだけでなく、どこか現実的な要素のある親しみのある世界であるからではないだろうか。

5 結論

村上春樹の小説は読みやすい文体を迫及したことで、同時に翻訳されやすい作品にもなり、多くの海外の読者をも獲得している。こうした「日本語性を排した日本語」が海外で多くの評価を得ているということはグローバル化していく国際社会において、日本語の新しい使い方としても役に立つものではないだろうか。

また物語理論を応用して作られた物語や、読者それぞれの解釈ができる物語は既存の文学作品にはない新たな楽しみ方が存在することも分かった。

参考文献

- 「風の歌を聴け」著 村上春樹（講談社文庫）
- 「1973年のピンボール」著 村上春樹（講談社文庫）
- 「羊をめぐる冒険 上・下」著 村上春樹（講談社文庫）
- 「ノルウェイの森 上・下」著 村上春樹（講談社文庫）
- 「スプートニクの恋人」著 村上春樹（講談社文庫）
- 「ふしぎな図書館」著 村上春樹（講談社文庫）
- 「カンガルー日和」著 村上春樹
- 「回転木馬のデット・ヒート」著 村上春樹（講談社文庫）
- 「TVピープル」著 村上春樹（文春文庫）
- 「女のいない男たち」著 村上春樹（文春文庫）
- 「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」著 村上春樹（文春文庫）
- 「レキシントンの幽霊」著 村上春樹（文春文庫）
- 「パン屋再襲撃」著 村上春樹（文春文庫）

「東京奇譚集」著 村上春樹（新潮文庫）
「神の子どもたちはみな踊る」著 村上春樹（新潮文庫）
「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド 上・下」著 村上春樹（新潮文庫）
「ねじまき鳥クロニクル 第一部 泥棒かささぎ編」著 村上春樹（新潮文庫）
「ねじまき鳥クロニクル 第二部 予言する鳥編」著 村上春樹（新潮文庫）
「ねじまき鳥クロニクル 第三部 鳥刺し男編」著 村上春樹（新潮文庫）
「海辺のカフカ 上・下」著 村上春樹（新潮文庫）
「1 Q 8 4 BOOK 1 前編・後編」著 村上春樹（新潮文庫）
「1 Q 8 4 BOOK 2 前編・後編」著 村上春樹（新潮文庫）
「1 Q 8 4 BOOK 3 前編・後編」著 村上春樹（新潮文庫）
「職業としての小説家」著 村上春樹（新潮文庫）
「騎士団長殺し 第一部 顛れるアイデア編 上・下」著 村上春樹（新潮文庫）
「騎士団長殺し 第二部 遷ろうメタファー編 上・下」著 村上春樹（新潮文庫）
「村上さんのところ」著 村上春樹（新潮文庫）
「月と六ペンス」著 サマセット・モーム（新潮文庫）
「変身」著 フランツ・カフカ（新潮文庫）
「フラニーとズーイ」著 J・D・サリンジャー（新潮文庫）
「コンビニ人間」著 村田沙耶香（文春文庫）
「読むことの可能性 文学理論への招待」著 武田悠一（彩流社）
「羅生門・鼻」著 芥川龍之介（新潮文庫）
「物語もっと深読み教室」著 宮川建郎（岩波ジュニア新書）
「村上春樹スタディーズ 1・2・3」編 今井清人（若草書房）
「テキスト分析入門」著 松本和也（ひつじ書房）